連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「臼杵鑑速～筆頭家老として島津氏と交渉～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2023年2月24日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

臼杵鑑速

臼杵氏は、古代豊後の豪族大神氏の一族で、中世には守護職として豊後に入国した大友氏一族との縁戚により繁栄しました。特に戦国期の当主臼杵長景は、海部郡臼杵庄（臼杵市）に水ケ城を構え、主君大友義鑑を支える最上位の重臣「加判衆」に登用されます。

長景には、鑑続、鑑速（「あきすみ」もしくは「あきはや」とも）らの息子がいて、家督は16世紀前半に鑑続が継ぎ、加えて筑前国志摩郡代（福岡市西区～糸島市）となって、大友氏の北部九州統治に貢献しました。16世紀半ば以降には、弟の鑑速が家督を継ぎ、加判衆を務めます。

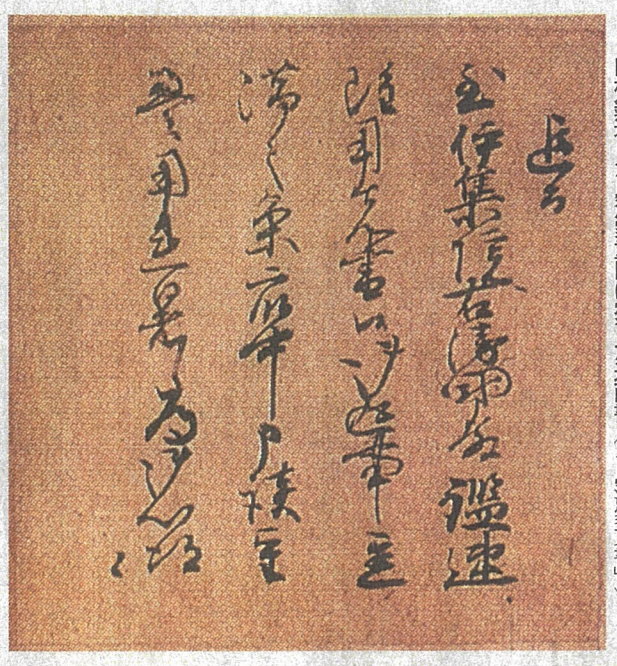
この鑑速の時代、大友義鎮（宗麟）の船を巡るいざこざが、島津氏との間で起こります。いきさつは次の通りです。

天正元（1573）年、義鎮は、外交協約を結んでいたカンボジア国王バロム・レアッチア1世（1520年生まれ、66年即位、76年没）に向けての貿易船を派遣します。カンボジア国の都ロンベークに到着した使節団は、国王への書簡と進物を献上し、貿易取引にも成功しました。

国王から義鎮に宛てた返礼品と交易品を満載した船は、帰路、東シナ海を北上して九州南方海域まで戻ってきますが、「天風」不順のため豊後への九州東岸ルートに入ることができず、薩摩西岸の阿久根に避難入港します。「大風」は港内でも吹き荒れ、係留中の大友船はついに「少過」（破損）して操船不能になりました。

大友氏側は、島津氏側に2度にわたって書状を出して、船の安否を尋ね、積み荷の返還を要求します。その2度目の書状の追而書の文面は、以下の通り。

筆頭家老として島津氏と交渉



臼杵鑑速らが島津家重臣に宛てた追而書（「島津家文書」）

「伊集院右衛門尉殿に至り鑑速先書を用い候と雖も、御返事遅滞の条、衆中申し談じ、重畳連署を用い候」

文面から、船と積み荷の返還交渉に際し、最初に島津家筆頭家老の伊集院忠棟に手紙を送ったのが、「鑑速」＝臼杵鑑速だったことが分かります。つまり、難破船の処遇を巡る島津氏との交渉に際し、当初の大友氏側は両家の筆頭家老同士のコネクションによって、事態の収拾を図ろうとしたのです。

しかし、鑑速の問い合わせに対して忠棟からの返事は届きませんでした。そこで再度の交渉では、大友家重臣4人が島津家重臣6人に宛てる連署書状の形式で、船の返還を求めたのでした。

このカンボジア派遣船を巡る騒動以降、大友・島津両家の関係は急激に悪化し、天正6(78)年の耳川の戦い(宮崎県木城町)という全面戦争に突入していきます。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

＝月1回掲載＝